

## 須賀さんの宝石箱

辻 憲男 (文学部教授)

芦屋の里に住む公光(きんみつ)は、ある夜ふしぎな夢を見た。京都紫野の花の木蔭に、二条后(にじょうのきさき)と在原業平が本を持って立っている。これは、日ごろ愛読している『伊勢物語』の秘密を教えようという夢告げであるにちがいない。公光は急いで京へのぼった。花の下で休んでいると、はたしてそこへ業平の亡霊があらわれた…(謡曲「雲林院」)。

業平の別荘があったという芦屋川の東岸。それから千年の間、のどかな田園風景が広がっていた。1905年に阪神電車が開通してから、にわかに別荘と住宅の街に変わった。エッセイスト・須賀敦子はここで育った。阪急夙川に近い里山は、「太陽に白くきらめく花崗岩の地肌に、アカマツやクロマツに下生えの灌木などそれぞれの微妙にちがった緑が映えて」、すばらしいながめだった。初夏は山ツツジの群落が山肌をおおった。昭和ひとけた生まれの“昆虫少女”は、捕虫網を手に山を駆けまわった。9歳まで宝塚のカトリックの小学校にかよった。東京の本校に転校したが、六甲の風景が恋しかった。「私は、勉強をせさせと怠けて本を読み、その本の内容をまた、せさせと現実に運びこんでは、ひたすらぼんやりと暮らすようになった」(『遠い朝の本たち』)。

須賀の本業はイタリア文学者。阪神間を舞台にした小説の翻訳も手がけた。ミラノや東京に住んでも、幼い頃の風と光は宝石箱のように輝いていた。



業平の父・阿保親王の塚と伝える。  
住宅地の中を山手幹線道路が通りぬける。